

漱石漢詩注訳拾遺

金 原 理

明治三十年（一八九七）十二月十二日に漱石は熊本県飽託郡大江村四〇一番地から、下谷区根岸町八十二番地に住む子規にあてた手紙で、病気を見舞ったついでに、「小生碌々矢張因例ろくろくやはりれいによりて れいのごとく 如例ごぎさふらふに御座候。俳句頓とんものならず、囊底なうていと共に弘底ひらていに御座候。頃日けいじつ五言律一首を得候間、御笑覽おんがひあけに供し候。御大政願上候」としたためて、次の詩を書き送っている。

無 題

掉頭辞帝闕	かしら	ふ	ていけつ	じ
	頭を	掉りて	帝闕を	辞し
倚劍出城闈	つるぎ	よ	せいけん	い
	劍に	倚りて	城闈を	出づ
峯嶽肥山尽	そつりつ	ひ	びざん	つ
	峯嶽として	肥山	尽	き
滂洋筑水新	ほうやう	あたら		
	滂洋として	筑水	新	なり
秋風吹落日	しゅうふう	らくじつ	ふ	
	秋風	落日を	吹	き
大野絶行人	だいや	かうじん	た	つ
	大野	行人を	絶	つ
索寞乾坤蹊	さくぼく	けんこんくろ		
	索寞として	乾坤	蹊	く
蒼冥哀雁頻	そうめい	あ	より	
	蒼冥	哀雁	頻	なり

この詩は、松岡讓の『漱石の漢詩』（朝日新聞 昭和四一年九月）をはじめとして、吉川幸次郎の『漱石詩注』（岩波新書 昭和四二年五月）や、新しいところでは飯田利行の『漱石詩集譯』（国書刊行会 昭和五一年六月）、中村宏の『漱石漢詩の世界』（第一書房 昭和五八年十月）など、漱石の漢詩について触れたものにはたいてい取り上げられている。

詩をこれらの注にしたがってたどると、

人のひきとめるのをふり切って東京を発って熊本へやって来ると、高くけわしい肥後の山なみが尽きて、眼前に広々とした筑後川が開けた。日暮れ時に秋風が吹いて、曠野には人っ子一人いない。あたりは気が滅入るように淋しく暗く、深い藍色をした大空に群をはなれた雁が、しきりに悲しげに鳴いている。となろうか。

ところで詩には、地形の上でいくつかの矛盾があることに気が付く。まず、漱石の熊本への下向が東京からであるにしろ松山からにしろ、西下することになるので、肥山（肥後の山々）と筑後川の位置が逆であることがあげられる。それから現実の肥後の山々はなだらかな丸みを帯びた連山であって、高くもけわしくも

ないし、筑後川と肥山との間には筑後平野が開けていて、肥後の山々が尽きてすぐ筑後川が目飛び込んで来るといようなロケーションではないことなど、地形の矛盾は三句目四句目（頷聯）に集中している。

前に掲げた諸注釈書はいずれもこの部分にてこずっているようで、たとえば中村宏は肥山を肥前、つまり佐賀の山とも考えているが、佐賀の山と筑後川の間にはやはり筑後平野が広がっていて、両者の距離は筑後川と肥山との間より遙かである。

漱石はこの時より半年ほど前に久留米の高良山に登っているが、その時の様子を明治三十年四月十八日付で子規にあてて、

今春期休に久留米に至り高良山に登り、夫より山越を致し発心と申す処の桜を見物致候。帰途久留米の古道具屋にて士朗と淡々の軸を手に入候につき、御慰の為め進呈致候。勿論双方とも真偽判然せず。

としたため、「葉の花の遙かに黄なり筑後川 山高し動ともすれば春曇る、拝殿に花吹き込むや鈴の音」などの句稿とともに送っている。

高良山は山腹に神社があるが、そこへ至るには急な坂と勾配のきつい石段を登らなければならない。たしかに近くを通る高速道路から眺める高良山は麓から急に聳え立つようで、漱石はこの急坂を登り神社に参詣して山越えをしたのである。そして山頂から足下をゆったりと流れる筑後川を目にしたのであった。

この山頂からの筑後川の眺望は漱石にとってかなり印象的なものであったらしく、この時から九年後に成った『草枕』の冒頭の素材ともなっている（古川久『漱石の書簡』）。

ここで件の漢詩の、いま話題としている頷聯の二句、「峯嶽として肥山尽き、滂洋として筑水新なり」（高くけわしい肥後の山なみが尽き、眼前に広々とした筑後川が開けた）に立戻ってみよう。あらためてこの二句を眺めてみると、漱石の高良山登山の印象がここにも語られていると思うのだが、いかがなものであろう。こう見れば、地形の矛盾も解決することになる。

漱石の熊本を詠んだ詩の注釈のこうした問題点を指摘することは、地元（きんぱらに居る者の務めでもあろう。

（きんぱら ただし 文学部教授 比較文学）